



水墨画
山田文行さん

6

「元巢の杜桜舞う」と題された壁一面のダイナミックな水墨画。天まで伸びた桜の木立、近づいてよく隅々まで眺めると……うすもも色の桜の風そよぐ中に、隙間を縫うように神社の鳥居や町並みが丹念に描き込まれていました。優しくおおらかで、う～ん！めまいと吸い込まれそうな不思議な魅力を湛えています。

「元巢の杜は、むかし道にある神社。そこから奥氷川神社が良く望めるんです。それから、これは愛宕山。この空間はとくべつ神秘的なんですよ。」そこで、一つの画面に包み込むように一緒に描いて、感じられる大きな広がり、繋がりを表したそうです。「この地でふっと嗅ぎとる、暮らしに息づいている風俗や歴史の匂いのするもの、日常生活を超えたものに強く惹かれるんです。それを絵という、目に見える形に表現していきたいですね。」だからでしょうか？読み込む面白さがあります。

絵を描くようになって奥多摩を見渡して、「なんだ、ここはいいじゃないかと。特に、山々が天を支えているという、この感覚がなんとも手放しがたいですね。」この絵には、生まれた地への愛が込められています。



そうなんです！この絵にはワインが良く似合うんです。奥多摩の喫茶店「山鳩」にて個展中の朗らかな笑顔の山田さん。現役の建築設計士でもあります。設計の仕事も線を一本一本引く仕事ですが、水墨画を学ぶことで（向原美先生に師事）、懸腕直筆という独特の線描方法も教わったそうです。

現在観ることのできる山田さんの作品は、御岳山（御岳駅下車）の宿坊「山香荘 一宮坊」のロビーに飾られています。（宿坊連絡先 地図ページ参照）



「台所が私のアトリエなんです。」取材を申し込んだ電話口で、返ってきた答え。

星々がちりばめられた夜空に、無限の広がり孤独を確かめるように佇む、一匹の羊（写真下）。銅版画の作品です。原版となる銅版を、プレス機で紙に刷った作品の横においてもらいました。反転する世界が現れて、交互に見返してしまいます。原版も見応えがあり、美しい存在感があります。

他にも、亀や山羊、動物を擬人化したものが飯田さんの作品には多く、ポップでも不思議な静けさと明るさがあります。「CGを学びたくて渡米して、10年ほどをボストンで過ごしました。SMFAという、芸術を志す人たちが世界中から学びに来る学校があるんです。」卒業後は、その学校の版画・紙工房のマネジャーとして働き、生徒がやりたいことを何でも教える立場に。いろんな人種の生徒さんに教えるというのは、想像以上に大変だったと思うのですが、からりと語ってくれるその姿には、作品と通じるものがあります。

ご自身も、表現方法にはこだわりません。作品に発展するアイデアはいたずらに描きからでそうで、「友達と長電話してぐるぐるっとペンを走らせていることってあるでしょう？私の場合そんな時にあ、これ、っていうものができるんです。」そして家の中の、いっとう居心地の良い台所で、作品を形にしています。



3

版画（現代美術）
飯田佳子さん

SMFA

School of musium of fine artの略称。世界4大美術館の一つ、浮世絵の収蔵数が日本に次いで多いことでも知られるボストン美術館（MFA、musium of fine art）の経営する学校。希望すれば複数の分野を学ぶことができる自由なカリキュラムが特徴です。



「これらの作品は、亡くなった恩師の肖像で、私にとっても特に思い出のあるものなんです。宮沢賢治の作品『銀河鉄道の夜』の世界を借りています。」

7

